

今回の特別講演・シンポジウム開催にあたって

澤田拓士（動物用抗菌剤研究会 理事長）

最近の動物用抗菌剤をめぐる主な話題は耐性菌と残留である。新薬の開発が含まれていないのはいささか淋しい気がする。新薬の開発研究は営々と継続されているわけだが、今は前二者の問題を克服することが命題であり、それによって新薬開発の新たな展望が開けることを願っている。耐性菌の増加を抑制するために「抗菌剤の適正かつ慎重な使用」が叫ばれており、これを広く啓蒙し、実行しなければならない。その一端を担っている本研究会の活動は重要と思われる。本年度の特別講演・シンポジウムの課題選定においても検討委員から多様な提案を出して頂き、討論した結果、やはり、耐性菌の問題が採りあげられることになった。今回は人医療分野と畜水産分野という立場から変化の激しい耐性菌の現状を眺め、それぞれの問題点と対策をクローズアップさせてもらうこととした。

そこで、特別講演は「ヒト臨床現場で監視すべき新しい耐性菌の動向と対策」と題して国立感染症研究所の荒川宣親先生にお願いした。シンポジウムは「畜水産分野における薬剤耐性菌の動向と対策」をテーマとして、まず、総論的に「食用動物における耐性菌抑制の方策—抗菌剤の慎重使用

の原則—」と題して酪農学園大学の田村 豊先生にお願いし、続いて「乳房炎起因菌の薬剤耐性化の現状とバンコマイシン耐性腸球菌 (VRE)、基質拡張型 β -lactamases (ESBLs) 産生菌, Metallo- β -lactamase (MBL) 産生菌, 多剤耐性緑膿菌 (MDRP) の分離状況」について北海道根室地区 NOSAI 検査室の大西 守先生に、「水産用医薬品を巡る最近の動向」について農林水産省水産安全室の大石浩平先生に、さらに、「 α 溶血性レンサ球菌症および類結節症の薬剤耐性とその疫学—各種 α 溶血性レンサ球菌症由来株の性状解析も含めて—」について農林水産省動物医薬品検査所の川西路子先生にご講演頂いた。

荒川先生には人医療の現場で大きな問題となっている耐性菌について詳細に紹介して頂いた。シンポジウムでは田村先生から食用動物における抗菌剤使用の基本を教示頂いた後、畜産と水産における耐性菌の現状と対策をそれぞれ現場でご活躍の先生方に紹介して頂いた。今回のご講演により、耐性菌の現状について理解を新たにしたわけであるが、これらの知識を大いに利用しなければならないと思う。